

【特別支援学校用】

令和7年度学校評価 結果・学校関係者評価

| 達成度(評価) |               |
|---------|---------------|
| A       | : 十分達成できている   |
| B       | : おおむね達成できている |
| C       | : やや不十分である    |
| D       | : 不十分である      |

|               |   |
|---------------|---|
| 学校名           | 佐賀県立金立特別支援学校  |
| 1 前年度 評価結果の概要 | <ul style="list-style-type: none"> <li>成果指標(数値目標)はほとんどの項目で達成しており、「業務効率化の推進と時間外在校時間の削減」だけがB評価で、それ以外はすべてA評価となった。</li> <li>本校は障害の程度が非常に重い児童生徒が多く在籍しており、効果的なICTの活用と教職員の専門性を高めることについては、今後も学校としての課題である。</li> <li>業務の効率化と時間外勤務の削減を一層図り、その成果が職員のメンタルヘルスに良い影響を及ぼすとともに、教育活動の根幹である授業準備が十分にできていると多くの職員が実感することを目標としていく。</li> </ul> |
| 2 学校教育目標      | <ul style="list-style-type: none"> <li>児童生徒の一人一人の状況(障害の状態や発達段階、特性)に応じた教育を実践する。</li> <li>児童生徒が、「明るく」「正しく」「たくましく」生きていく力を育成する。</li> </ul>  |

|            |  |
|------------|--|
| 3 本年度の重点目標 | <p>「つなぐ未来 — 明るく、正しく、たくましく」</p> <p>①児童生徒の主体性を尊重しながら、個に応じた教育を充実させる。</p> <p>②自立と社会参加に向けて、児童生徒の夢や希望を大切にすることを充実させる。</p> <p>③健康・安全教育を進めるとともに、思いやりや豊かな心を育む教育を充実させる。</p> |
|------------|--|

4 重点取組内容・成果指標 5 最終評価

| (1)共通評価項目          | 重点取組 |  | 具体的取組   | 最終評価   |  | 学校関係者評価  |  | 主な担当者   |  |  |
|--------------------|------|--|---|--|--|--|--|---|--|--|
|                    | 評価項目 | 取組内容   |   | 成果指標(数値目標)   | 達成度(評価)  | 実施結果   | 評価   |   | 意見や提言  |  |
| ●学力の向上             |      | ○児童生徒一人一人のニーズに応じた指導・支援による確かな学力の定着                              | ○児童生徒の実態把握を行い、学習指導要領の各教科等の内容を踏まえた学習内容や目標を設定し、学力の定着につながる授業ができたことと回答する職員が80%以上        | A  | <ul style="list-style-type: none"> <li>職員98.9%保護者98.4%と中間評価よりも数値が高く目標は達成できた。</li> <li>本年度は、複数職員による実態把握に基づき学習目標および個別の指導計画を適切に設定し、個に応じた指導・支援を実施した。学習グループにおいて評価に基づく授業のPDCAサイクルを通して授業内容や評価の見直しを行い、授業改善が進んだ。ケース会及び校内研究では、児童生徒の成長や課題を共有し、指導と評価の一体化を推進したことにより、学習の深まりと幅の拡大が認められた。また、保護者への情報提供を継続的に、学校と家庭の連携が強化された。これらの取組により、児童生徒の学力の確実な定着が図られた。</li> </ul>                         | A  | <ul style="list-style-type: none"> <li>数値目標は80%を保護者も職員も超えているので、概ね目標を達成している。</li> <li>昨年度、また中間評価よりも評価が高く、より達成度が上がっていることと評価できる。</li> <li>学力の定着において家庭への情報提供を継続し、家庭との連携に重点を置かれた点も評価できる。</li> <li>素晴らしい取り組みである。</li> </ul>  | 教務部   |  |  |
|                    |      | ○児童生徒の主体的・対話的な学びの実現に向けたICTの効果的な活用                              | ○アンケート調査でICT機器を活用し、主体的・対話的な学びの実現ができたことと回答する職員、保護者が70%以上                             | A  | <ul style="list-style-type: none"> <li>ICT環境の整備を行い児童生徒の実態に応じたアクセシビリティ機能の導入をする。</li> <li>個々に応じた表現や対話への参加ができるようICT機器を用いた学習活動の工夫をする。</li> </ul>   | A  | <ul style="list-style-type: none"> <li>目標はおおむね達成できた。職員の評価では89.6%、保護者の評価では94.7%とICT機器が学習の中で効果的に活用され、自ら学ぶ力につながっているという最終評価が出ている。今年度効果的な活用につながった事例等は次年度に引き継ぎ、主体的・対話的な学びの継続を推進していきたい。</li> </ul>  | A   | <ul style="list-style-type: none"> <li>特別支援教育の中でICTの活用は非常に重視されているが、この目標が一人歩きすると、どの子も使わないといけないと教員が誤って捉え、数値があげられなくなるので、一定の考慮が必要ではないかと感じる。</li> <li>ICTの活用のより生徒自ら学ぶ力を伸ばせていることはとても高く評価できる。</li> <li>人手不足の現場における効果も大いに期待できるので、今後もぜひ継続してもらいたい。</li> </ul>  | 学習・情報部   |
|                    |      | ○児童生徒の主体性を尊重しながら、個に応じた進路指導の充実                                  | ○進路についての意見を十分に聞き、適切な指導がなされていることと回答する保護者が80%以上                                       | A  | <ul style="list-style-type: none"> <li>個に応じた資料を必要に応じて作成し、職員、保護者へ提供する。</li> <li>教職員を対象とした進路指導研修会や保護者を対象とした進路説明会を行う。</li> </ul>  | A  | <ul style="list-style-type: none"> <li>丁寧な対応を心掛けた結果、保護者評価で98.3%が達成できているとの回答であった。特に、本校舎中学部と高等部では達成できているとの回答が100%であった。</li> <li>下期は全体での研修や説明会は行わず、個別の対応を行った。来年度の効果的な実施方法を検討している。</li> </ul>  | A   | <ul style="list-style-type: none"> <li>今年度の高等部3年生は、就職希望者がいない。9名が卒業見込みである。</li> <li>生徒、保護者にとって大きな分岐点となる今後の進路指導について、これだけ高い評価を得られていることは、とても丁寧な指導をされているのが伺える。</li> <li>アンケートの結果は全体的に高い数値が出ている。職員の専門性を高めていきたい。</li> <li>知的障害の併置に当たって、受け入れの事業所開拓に取り組んでいく必要がある。</li> </ul>  | 進路指導部  |
| ●心の教育              |      | ●児童生徒が、自他の生命を尊重する心、他者への思いやりや社会的、倫理的な正義感、感動する心など、豊かな心を身に付ける教育活動 | ○心の教育活動や生命を尊重する教育に取り組むことができていることと回答する職員が85%以上                                       | A  | <ul style="list-style-type: none"> <li>児童生徒の呼称等、児童生徒への職員の言動に関する意識向上を図るため、教務部・生徒指導部と連携し、アンケート調査を行う。</li> <li>児童生徒会活動の一環として、嬉しかったことや友達の良い所をカードに書き出し、「えがおの木」に貼り付ける活動を行う。</li> </ul>   | A  | <ul style="list-style-type: none"> <li>職員の評価では99.1%、保護者の評価では96.9%が児童生徒の豊かな心を育むことや、自他の生命を尊重する教育に取り組むことができていると回答した。今年度も「えがおの木」に取り組むことができ、豊かな心を育むことができている。また、児童生徒会の月ごとの目標には「ふわふわ言葉を使おう」という目標を自分たちで掲げるなど主体的に取り組むことができている。児童生徒の呼称についても、「さん」付けや、一人一人を大切に思う意識をより一層職員間で共有していきたい。</li> </ul>  | A   | <ul style="list-style-type: none"> <li>生徒の主体的な取り組みにつながる日々の活動、先生方の関わりの中での意識など、しっかり取り組まれているのが伺える。</li> <li>アンケートの数値は目標を超えているので、概ね達成できている。</li> <li>児童生徒の呼称については、職員間の意識は高まってきているが、まだ、一部に児童・生徒の年齢にそぐわない言葉掛けをしている職員を見かけるので、引き続き改善に取り組んでいく。</li> </ul>   | 教務部<br>(人権・同和教育担当)<br>生徒指導部  |
|                    |      | ●いじめの早期発見、早期対応に向けた取組の充実  | ○いじめ防止等(いじめの定義、いじめの防止等のための取組、事案対処等)について、取り組むことができていることと回答する職員が85%以上                 | A  | <ul style="list-style-type: none"> <li>いじめアンケート等を年2回実施し、覚知した場合は委員会を開き教職員間で情報共有する。</li> <li>いじめに対する教職員の意識啓発のため、研修を年1回実施し、学期ごとに啓発活動を行う。</li> </ul>   | A  | <ul style="list-style-type: none"> <li>職員の評価では99.1%、保護者の評価では98.4%がいじめ防止等(いじめアンケートを実施したり、互いのことを尊重し、認め合う雰囲気を作ったりすること)に取り組むことができていると回答している。</li> <li>いじめアンケートで出た事案を情報共有し、早期対応に努めることができた。</li> <li>いじめに対する研修も実施することができ、教職員の意識向上にもつながっている。また今年度も、覚知事案が数件発生したが担任をはじめ連携を取ることができ認知や重大事態まで至ることはなかった。</li> </ul>   | A   | <ul style="list-style-type: none"> <li>学校全体でいじめ防止に取り組まれていることが評価できる。達成できていても継続的に取り組むことが必要な内容と感じる。</li> <li>いじめ防止に向けた取り組みは、学校全体で取り組むべき内容であると思う。数値目標の85%に対し、99.1%の評価となっているが、数値目標は上げてほしいと思う。</li> <li>来年度は知的障害のある児童・生徒が入学してくる。いじめ防止等に向けた新たな対応ができるように、情報収集を行ってほしい。</li> </ul>   | 生徒指導部  |
|                    |      | ●児童生徒が夢や目標を持ち、その実現に向けて意欲的に取り組もうとするための教育活動。                     | ●「先生はあなたのよいところを認めてくれていると思う」と回答した児童生徒80%以上<br>●「将来の夢や目標を持っている」について肯定的な回答をした児童生徒80%以上 | A  | <ul style="list-style-type: none"> <li>授業等の中で児童生徒のよいところを評価する場面を設定したり、成果を披露する場を設けたりする。</li> <li>将来の夢や目標、楽しみにつながる授業内容を工夫し、児童生徒の得意なこと、好きなことが増えるような授業づくりができているか校内研究で検証する。</li> </ul>   | A  | <ul style="list-style-type: none"> <li>最終的に肯定的な回答をした保護者が98.4%と、中間評価より増えた。教職員の肯定的な回答が100%と、自己肯定感を高めることを意識した授業づくりに取り組むことができた。</li> <li>最終アンケートでは、保護者の「4」回答率が6.1%上昇し63.5%となった。「3」回答率は1.7%向上し、96.8%となった。共に向上していることから、校内研究で力を入れて取り組んだ授業づくりと学習・指導改善の研究が実を結んだと考えている。</li> </ul>   | A   | <ul style="list-style-type: none"> <li>自己肯定感を高める授業づくり、とても難しいテーマだと思うが、良いところを評価したり、成果を発表したり、自信につながる取り組みの結果だと思う。</li> <li>中間評価より高い評価になっていることは評価できる。</li> <li>児童生徒の自己肯定感が高まるよう、授業等の中で良いところを評価したり、成果を披露する場を設けるなどの授業改善を行った。今後もより自己肯定感が高まるような授業改善に取り組んでいく。</li> </ul>   | 自立活動部<br>研究部   |
| ●健康・体づくり           |      | ●「望ましい生活習慣の形成」   | ○指先を意識した手洗いの指導ができていることと回答する保護者、職員が80%以上   | A  | <ul style="list-style-type: none"> <li>現在ある手洗い手順書を改良し、指先を意識した手洗いをしよう職員へ呼び掛け児童生徒への指導を行う。</li> <li>感染症予防に関する研修及び保健指導(動画視聴)を行い意識の向上を図る。</li> <li>毎月のほけんだよりで校内の手洗いの様子を掲載し発行する。</li> <li>毎月第3木曜日の「感染症予防の日」に、教職員の理解啓発を図る。</li> </ul>   | A  | <ul style="list-style-type: none"> <li>各学部において保健指導を複数回行い、児童生徒へ手洗いの必要性や、手洗いチェックシートを使用し、指先を意識した手洗いの仕方を指導した。</li> <li>保護者の評価では91.9%、教職員の評価では、94.8%が指先を意識した手洗いの指導ができていると回答した。しかし、保護者の評価が中間評価よりも2.9%下降しており、児童生徒が意欲的に、習慣的に手洗いをやるような手立てや取り組みの検討が必要であると考えた。また、ほけんだよりだけでなく掲示物の場所や掲示内容を見直すなど、感染症予防に関する情報の周知も併せて検討していく。</li> </ul>  | A   | <ul style="list-style-type: none"> <li>手洗いという毎日行うことに着目した取り組みはとても大切だと感じる。自分で洗うことができない児童・生徒であっても、介助してしっかり手洗いできるという習慣は、成人期にもとても重要なので、将来にもつながると思う。</li> <li>児童生徒への手洗い指導、職員研修を行い、正しい手洗いの指導を行ったが、保護者の指標が中間評価よりも下がっていたので、児童生徒が意欲的に手洗いが習慣化するよう手立てや取り組みの検討が必要である。</li> </ul>  | 保健部  |
|                    |      | ●効果的な地域支援に向けた特別支援学校のセンター的機能の充実                                 | ○巡回相談等におけるセンター的機能報告の文書案内や、校内研修及び公開研修等の実施が専門性の向上につながったことと回答する職員が85%以上                | A  | <ul style="list-style-type: none"> <li>校外支援として巡回相談の実施、電話相談や学校見学等の対応を行う。</li> <li>校内支援として各学部(コーディネーターを配置し、学部間での教育相談体制を整え、他校協働等との連携協力、他特別支援学校の巡回相談、専門家派遣や校内研修を行い、教職員の専門性の向上を図る。</li> <li>公開研修会の計画や案内を行い、専門性向上のための理解啓発を図る。</li> </ul>   | A  | <ul style="list-style-type: none"> <li>専門性の向上につながっていると回答した職員が95.8%で中間評価よりも2.9%増え、数値目標を上回った。巡回相談は、新規案件だけでなく、継続的に巡回相談を利用する学校も多い。また地域の保育園幼稚園小学校中学校から電話での相談も受けており、電話相談から巡回相談につながるケースもあった。センター的機能を果たしている一方で、巡回相談に対応できる職員の確保が課題としてあげられる。</li> <li>校内支援は、各学部のコーディネーターと連携することで教育相談体制を構築し、迅速に対応することができた。また教職員の専門性の向上を図るために公開研修を行ったが、研修後のアンケートでは、とても勉強になった、もっと話が聞きたい、児童生徒の指導支援に生かしたいなど、教職員として子どもの理解への意識が非常に高まった内容が多かった。</li> </ul> | A   | <ul style="list-style-type: none"> <li>アンケートの結果は概ね達成している。</li> <li>社会的にとっても重要な役割を果たされていると感じる一方で、対応できる職員の確保という大きな課題は、今後の継続にあたって懸念点と感じる。</li> <li>センター的機能を保つために職員の専門性を高める必要があり、専門家を招いて助言を受けたり、公開講座を3回開いたりした。</li> <li>課題としては、研修内容のさらなる充実、巡回相談等ができる職員の確保、支援体制づくりを整える取り組みを継続したい。</li> </ul>  | 相談支援部  |
| ●業務改善・教職員の働き方改革の推進 |      | ●業務効率化の推進と時間外在校等時間の削減  | ●教育委員会規則に掲げる時間外在校等時間の上限を遵守する。<br>●年間20日の年次休暇のうち、職員1人当たりの年次休暇の取得日数14日以上              | A  | <ul style="list-style-type: none"> <li>行事の削減と簡素化、準備の効率化等に取り組む。</li> <li>月1回の完全定時退勤日と月3回の定時退勤推進日について引き続き推奨・実施していく。</li> <li>休暇を取得しやすいように、夏季休業中に6日間の学校閉庁日进行を設ける。</li> <li>長期休業中の会議・研修は、できるだけ実施期日の集約を行う。</li> <li>冬季休業中に2日以上年次休暇を呼び掛ける。</li> <li>執務室(職員室)では、休憩時間後の業務開始時に15分間の無言集中タイムを設け、一人で集中して作業できる環境を作る。</li> <li>各種会議・打合せの時間は50分以内を目標とし、会議開始時に終了予定時刻を伝えて意識付けする。</li> </ul> | A  | <ul style="list-style-type: none"> <li>定時退勤日や夏季休暇、年次取得によりリフレッシュできたことと回答する職員が90.4%、16時からの執務時間を集中して業務に当たることができたことと回答する職員が91.3%であった。4月から1月までの時間外在校時間は、平均して12時間29分であり、教育委員会が定める45時間の上限を超えてはいない。年休については、職員の4月から12月の年次取得は、一人当たり12日2時間32分となっており、目標の14日(10カ月換算11.7日)を達成している。</li> </ul>  | A   | <ul style="list-style-type: none"> <li>年次取得目標が達成できたこと、昨年よりさらに時間外勤務を削減できたことは素晴らしいと思う。しかし、事務集中タイムの設置だけで実質ここまで時間外勤務が削減できるのか、どこかに無理が生じていないのかや心配もある。</li> <li>年次取得は、1人当たり12日2時間32分となっており、また、介護休暇等様々な休暇と合わせると、14時間を超え、目標は達成している。</li> <li>「割り切って休みを取る必要がある」や「体調を崩してやむを得ず休みを取る年休がほとんどだった」という少数意見に対する対応としては、一部のみに業務が偏らないように、業務を改善したり、偏っていたことが分かった場合はその時点で他の職員に分散して軽減をしたりしてきた。</li> </ul> | 管理職  |
|                    |      | ●業務改善・教職員の働き方改革の推進   | ●業務効率化の推進と時間外在校等時間の削減   | ●教育委員会規則に掲げる時間外在校等時間の上限を遵守する。<br>●年間20日の年次休暇のうち、職員1人当たりの年次休暇の取得日数14日以上 | A  | <ul style="list-style-type: none"> <li>行事の削減と簡素化、準備の効率化等に取り組む。</li> <li>月1回の完全定時退勤日と月3回の定時退勤推進日について引き続き推奨・実施していく。</li> <li>休暇を取得しやすいように、夏季休業中に6日間の学校閉庁日进行を設ける。</li> <li>長期休業中の会議・研修は、できるだけ実施期日の集約を行う。</li> <li>冬季休業中に2日以上年次休暇を呼び掛ける。</li> <li>執務室(職員室)では、休憩時間後の業務開始時に15分間の無言集中タイムを設け、一人で集中して作業できる環境を作る。</li> <li>各種会議・打合せの時間は50分以内を目標とし、会議開始時に終了予定時刻を伝えて意識付けする。</li> </ul> | A  | <ul style="list-style-type: none"> <li>定時退勤日や夏季休暇、年次取得によりリフレッシュできたことと回答する職員が90.4%、16時からの執務時間を集中して業務に当たることができたことと回答する職員が91.3%であった。4月から1月までの時間外在校時間は、平均して12時間29分であり、教育委員会が定める45時間の上限を超えてはいない。年休については、職員の4月から12月の年次取得は、一人当たり12日2時間32分となっており、目標の14日(10カ月換算11.7日)を達成している。</li> </ul> | A  | <ul style="list-style-type: none"> <li>年次取得目標が達成できたこと、昨年よりさらに時間外勤務を削減できたことは素晴らしいと思う。しかし、事務集中タイムの設置だけで実質ここまで時間外勤務が削減できるのか、どこかに無理が生じていないのかや心配もある。</li> <li>年次取得は、1人当たり12日2時間32分となっており、また、介護休暇等様々な休暇と合わせると、14時間を超え、目標は達成している。</li> <li>「割り切って休みを取る必要がある」や「体調を崩してやむを得ず休みを取る年休がほとんどだった」という少数意見に対する対応としては、一部のみに業務が偏らないように、業務を改善したり、偏っていたことが分かった場合はその時点で他の職員に分散して軽減をしたりしてきた。</li> </ul> |

●…県共通 ○…学校独自 ◎…志と誇りを高める教育

|                |   |
|----------------|---|
| 5 総合評価・次年度への展望 | <ul style="list-style-type: none"> <li>今年度の最終評価はすべてA評価となり、少しずつ学校評価により、重点目標に向けた学校の取り組みは改善がされていると評価する。</li> <li>来年度は新校舎での知的障害の受け入れが始まるため、各項目の取組内容や成果指標についての見直しを行う予定である。今年度の分掌部内での検討を始めている。</li> <li>いじめ防止の取組については、児童生徒に関わる職員は100%を目標に取り組みべきではないかという学校評議員のご意見を鑑み、来年度の成果指標について検討を行う。</li> </ul> |
|----------------|---|